

淫魔導士になって、やらかしちゃう八幡

雪歩P

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

淫魔導という力を手に入れた比企谷八幡が、ヒロイン達に色々やらかしちやうお話です。

目次

始まり	1
1人目	4
変わり始めた八幡	8
多少の自制	11
朝の風景	15
次の候補	18
世界で一番の妹	23
新たな道に目覚めるかも	27
羞恥に染まる	32
順調な開発	37
寝ててもアウト	44
変化後の登校	47

始まり

最近では異世界転生モノの小説が増えてきているように思う。

確かに、チートスキルやら最強武器で無双し、ハーレムを作っていく主人公の物語は好みではあるし、剣を使いこなして魔法をぶつ放す自分を思い描いたりした時期も中学生くらいにはあった。

だがしかし、現実に魔法を使えるようになるなんて誰が想像出来るだろうか、いや出来ない！

「待て、マジで落ち着け……。」

中二病をぶり返して想像の世界にダイブしちゃったのかと思っただが、頬をつねっても痛みはある。

そして、目の前には変わらず半透明な板が浮かんでおり、俺のことだと思われる情報が書かれている。

名前：比企谷八幡

種族：人間（淫魔）

職業：淫魔導士

スキル：淫魔導レベル1

気配遮断レベル1

幻惑の魔眼レベル1

ツツコミどころ満載過ぎてわけわかんねー。

淫魔ってなんだよ淫魔って。淫魔導士ってなんなの？完全アウトな感じしかないんだけど？しかも気配遮断？ステルスヒツキーのことですわわかります。あと俺の腐った目は魔眼だったのかヒヤッホー！

「ヤベエ、全然落ち着けねえ。」

そもそもの発端は古本屋で見つけたいかにもなボロい本だった。

掘出し物の小説がないかと見て回っていたら、何故か吸い寄せられるように買ってしまった『誰でも簡単、魔導の心得』と題された赤いカバーの本で、よくわからない『魔導』というものについて書かれているようだった。

なんであんな本を買ってしまったのか今でもわからないが、持ち帰って部屋で改めて読み始めると、頭の中に突然浮かんだ『ステータスオープン』という言葉。

「ステータスオープン。」

つい口に出してしまい、途端に眩しい光が本から溢れ出して、たまらず目をつぶった。

目を開けると、本は消え、今に至るといわけだ。

「しかし、マジでどうなったんだこれ。魔導ってつまり魔法のことでもいいんだよな。材木座が喜びそうな展開だけど淫魔導士はないだろ。」

よく分からんが、完全にエロ方面の呼び名だよなこれ。

「仮にこれが俺のステータスだとして、だからどうしろって話なんだよなあ……………ん？」

なんか職業のところを注目し続けてたら詳細っぽいのが見えてきたぞ？

淫魔導士：淫魔導を扱う魔道士。淫気を吸収して成長する。

「……………さっぱりわかんねえ。」

淫気ってなんだ？いや待て、他の項目も見えるんじゃないやねえか？

淫魔導レベル1：対象の淫気に関する弱点部位がわかる

(効果微小)。対象の淫気を吸収する (効果微小)。

気配遮断レベル1：自身の気配を消す (効果微小)。

幻惑の魔眼レベル1：対象に催眠をかける (効果微小)。

なんとなくわかったような、わからないような。

「気配遮断と幻惑の魔眼についてはなんとなくだがわかる。効果微小つてのがどの程度なのかはわからんが、問題は淫気についてだな。まあ、おいおい調べていくしかねえか。」

ステータスは口に出さなくても念じるだけで出したり消したり出来るみたいだな。俺にしか見えないのかは確認しないといけないが。

まだ少し混乱している感はあるが、俺は魔導がどんなものか試

してみたたくてウズウズしていた。淫魔導なんて、普段の俺からすれば
関わりたくない名前に間違いないはずなんだが、剣と魔法の世界に足
を踏み入れた今、好奇心を抑えることは出来そうになかった。

1人目

「しかし……、問題は誰で試すかだよなあ。」

エリートぼっちである俺にとつて、こんな18歳未満お断りなスキルを使うには、まだハードルが高すぎる。

適当にそこら辺歩いてる人で試すのが、失敗しても今後の生活に影響がなさそうに思えるが…。

「見知らぬ人に声かけるだけでも十分ハードル高えんだよなあ。」しかも声かける理由を考えると尚更だ。

「かと言って学校の奴らで試すのもなあ。周りに誰もいない状態で、かつ、異性と話しができる可能性が高いのは……。」

奉仕部、か？

………いやいやいやいや、あいつらで試すとかないわー。確かに？今までにちよつとアレな妄想をあいつらでしたこともないわけじゃないけど？それとこれとは別っていうか？ハードルどころか走り高跳びに挑戦しちゃう勢いだしマジでツベーわー、いやテンパリ過ぎて戸部みたいになっちゃってるし。

「お兄ちゃん、晩御飯出来たから早く降りて来てー。」

「わっほい!!」

ヤベエ、びつくりし過ぎてどつかのアイドルみたいな声出しちゃまった。ていうかもうそんな時間かよ。

「お兄ちゃん?」

「あ、ああ今行く。」

落ち着け、小町はただでさえ鋭い奴なのに俺のことになるとエスパーパーりに心を読んでくる。流石に魔法、いや魔導を使えるようになったかもしれないなんてことはわからないだろうが、俺が何かを隠してるくらいは勘付かれるかもしれん。まずはいつもどおりに飯を食おう。

「おー、今日の晩飯はクリームシチューか。小町の作るシチューは最高に美味しいからなあ、八幡的にポイント高いぞ。」

「………どしたのお兄ちゃん。顔が引きつり過ぎてすごいことになっ

てるよ?」

「うえ!? あー、いやなんでもない。お兄ちゃん小町のご飯が楽しみ過ぎてテンション上がってるだけだから。ほら、いいから飯にしようぜ?」

「いや、それはそれでちよつとキモいけどさ。ほんとにどうかした? いつもより目が腐ってる気もするし。」

「だ、大丈夫だ。何も変わったところはないぞ? ってか目は余計だ、うお!」

「へ? ちよつと!」

何でもないことを伝えようとしたのか、俺は無意識に小町に近づこうとして足を前に出した際に、足を引っ掛けて小町の方に倒れこんじまった。

「いてて、小町だいじょう (ふによん)。」

「ひゃー!」

「へ? ……あ。」

うん。なんか左手が柔らかくて気持ちいい感触の物を鷲掴みにしちゃってるね。いやー、小町も成長したなあ (モミモミ)。

「うにゃー! ……この、いい加減に、しろー!」

「ふげ!!」

小町の奴、左フックで思いつきり右頬を殴って来やがった! 更に一瞬で立ち上がって、距離をとってやがる。

「このスケベ! 変態! エロ兄貴! 妹の胸を揉むなんて何考えてんの!?!」

「い、いや落ち着け小町、今のは不可効力で…。」

…ん? なんだこの感覚…?

「不可効力も何も、思いつきり揉んでたじゃん!」

…やべえ、わかるぞ。こんな状況だったのに。淫魔導が、相手の弱点部位っていうのと淫気吸収っていうのが何なのか、何となくわかる! (これは…)

「ちよつとお兄ちゃん! 話聞いている、んにゃあ!」

俺が今何をしているかって? ふつ、妹の胸を揉んで、親指と人差し

指で乳首を摘んだのさ！

兄の行動としては完全に頭悪い感じになっちゃってるが、淫魔導が発動した感覚がわかった瞬間、体が勝手に動いていた。弱点部位っていうのは、相手を感じやすいところ、感じるところで、今の小町からは淫気が漏れて来ていて、俺がそれを体に取り込んでいるのもわかる。相変わらず淫気についてはアヤフヤだが、淫気を吸収する感覚は今まで感じたことのない高揚感が溢れてくる感じだ。

「あ、ほんとに、んんっ！だめだって、んやあっ！」

小町は俺から離れようと両手で押そうとしているが、俺は右手を小町の背中を通して力強く抱きしめ、左手は変わらず小町の胸を揉んで乳首をこねくり回している。

小町から出てくる淫気は少しずつ量が増えているようで、それを吸収するごとに俺の中の何かが大きくなっていくのがわかる。どうすれば小町の体が喜ぶのか、わずかではあるが淫魔導の能力としてわかるようになってきた。

俺は小町を抱きしめて胸を揉みながら小町の左耳に舌を入れ、淫魔導で伝わって来た感じる箇所を舐めて、つつき、蹂躪する。唾液を滴らせ、わざと音を大きくし、耳の中を犯していく。

「だ、めえ。んはあー！これ以上は、んん、小町、もう。」

妹にこんなことをするのは間違っていると頭ではわかっているけど、淫気吸収の感覚に加えて、今まで見たことのない小町の『女』の顔を、乱れた声を聞いてしまい、俺はもう自分を止めることができずにいた。

「小町、小町……。」

「あ、やあ。ふうっ、ん、んあー！」

小町の体は大分力が抜けて来ていて、俺を押す力も弱く、ほぼ俺に体を預けている状態だ。更に、使い方がわかって来た魔眼で小町の思考を少し鈍らせて、感じる喜びに身を任せやすくさせる。

今は右手で小町の尻を撫で回し、揉みしだきながら、左手で小町の胸をせめ続けている。

小町はTシャツに短パンという薄着であり、柔らかい肌の感触を味

わいやすく、今ではすっかり自己主張している乳首が簡単に確認できた。

「あ、あ、もうだめえ、おにい、ちゃん…。」

「ああ。イケ、イクんだ小町。」

トドメに、尻をこれでもかと強く鷲掴みにし、乳首をしごき上げる！

「あ、んんっ。だめ、だめえ、い、く、いく、ん、んあああああ!!」

ビクンビクンと大きく体を跳ね上げたあと、完全に体を俺に預け、なおも体を小さく震わせている。

小町の短パンは股下が濡れて変色し、雌の匂いを漂わせていた。

変わり始めた八幡

……………今の状況を整理してみよう。

未だに少し息が乱れていて、体を俺に預けている妹。履いている短パンは愛液で濡れていて、いやらしい匂いを漂わせている。

それを見つめる、妹を盛大にイかせた鬼畜な兄。

……………うん、完全に事案だわ、これ。

おいおいおいおい、まずいだろこりや。あれえ？どうしてこうなった？

好奇心に負けたのがまずかったのか？でも淫魔導使えそうだったし？小町の体は触ってて気持ちいいし？いや、それだとまるで小町が悪いということになってしまいうじゃないか！

小町は悪くない！つまり悪い奴は誰もいなかったんだ。いやーよかつ、

「お兄ちゃん。」

ビククー—————!!!

まままままずい、このままだと俺の人生がここで終わっちゃう！

「えーと、こ、小町ちゃん？あ、あのですね…。」

「…………小町、シャワー浴びて寝るから。ご飯食べ終わったら片付けといて。」

「え、あ、ああ。」

小町は俺から離れ、そのままリビングを出て行ってしまった。雰囲気的には怒ってるような感じではない、か？

「あー、とりあえず家族崩壊の危機は免れたってことでいいのか？」

いや、小町がさっきのことを誰かに言わないとも限らない。冷静になった今、自分のしでかしたことが完全にアウトだったってことがよくわかる。わかってるのに。

小町から出て来た淫気を吸収する感覚が、乱れた小町の表情が、声、匂いが、忘れられない。

「どーなっちゃまったんだ、俺。」

最初は確かに事故だった。けど、昨日までの俺は妹に手を出したり

なんかしない。リスクだつて考えられる人間だ。なのに、今の俺は気を抜くとまた小町に手を出してしまうかもしれないという思いが、どうしても抜けない。少しずつ変わっていつているような……。あ、そういえば。

「俺のステータスはどうなってるんだ？」俺はステータスオープン、と念じてみる。

そして、明らかに内容が増えていた。

淫魔：淫気を吸収しやすい状況を作りやすい体質となる。精力が向上する。

「どうすんだよ、これ……。」

状況を作っちゃやう体質ってなんだよ。あれか？どこぞのハーレム主人公みたいになっちゃまったつてことか？

学校行つちやまずくね？あと最後のはスルーだな、スルー。

「しかし、変な渴き？みたいな感覚も少しあるんだよなあ。」

ほんの少しではある。でもこれは多分……

「女を、淫気を欲しがってるんだろうな。何となくわかるようになって来る。」

小町とのことは何とかしないとイケない。けど、今小町に近づくのはまずい気がする。

「はあ、どんどん変質者みたいになってきてる気がするなあ。」

食欲もなくなっちゃまったし、俺も寝るか。一晚経てば少しは収まるだろ。

なんて考えは、淫魔という存在を、淫魔導の力を、甘く見ていたよ
うだった。

「全部、お兄ちゃんが悪いんだからね？」

真夜中、ベットに上がって来た人の気配で目を覚ますと、俺を四つん這いの姿勢で覗き込んでいる小町と目があった。

一瞬マジでびびったが、小町の顔見て息を呑んだ。

あの時の、『女』の顔をしていたから。

「シヨックだった。けど、気持ちよくなることも我慢できなかった。何がなんだか分からなくなって、まずはお兄ちゃんから離れないと、つて思った。でもね？ダメなの。」

俺の中の枷が外れていくのが分かる。流されそうになってる自分がいる。

「小町の中の何かがお兄ちゃんを求めているの。触れ合いたいって思っ
ちやうの。」

ああ、どこまで我慢できるかなあ、俺。

「おかしいのはわかってる。けど、今は。……………体が切ないの、お兄
ちゃん。」

多少の自制

比企谷小町。

世界一可愛い俺の妹で、受験に合格し、今年の春から総武高校に通っている、高校1年生。

エリートぼつちの俺を見て育ったためか、コミュ力は高く、家事全般もこなし、あざとさを振りまく次世代型ハイブリッドぼつちである。

それなりに兄妹仲は良く、互いにブラコン、シスコン気味なところもあつたように思う（俺視点の話ではあるが）。

しかし……………。

（今の雰囲気は、そんなレベルの話じゃないよなあ……………。）

真夜中の密室、ベットの上的男女、若干発情している女性、今にも抱き合いそうな距離。世間一般の兄妹つてよりは、恋人のそれに近い。

（つていうか、小町から既に淫気が出てるんだが。）

少しではあるが、間違いなく出てる。やっぱり、発情してる時や性的な行為、それに類似する状況で出されるものってことでもいいのか？

まあ、つまりは小町もそれなりにスイッチが入ってるってことだよな。

淫魔としての体質の問題なのか、淫魔導を使った影響なのかはわからんが、女性をそういう気分にさせて淫気を吸収しやすくさせる存在が、今の俺なんだろう。それでも相手が妹なのはまずい。物凄く今更だけどな。

問題は俺がどこまで自分を抑えられるか、だな。淫気を感じると自分の中に飢えを、渴きを感じる。

「あー、小町。さつきは本当に悪かった。償いは後できちんとする。だから今はお互い離れてた方がいい。お前も混乱してるだろうし、また俺が手を出しちやったりしたら嫌だろ？」

「……………言つたでしょ？お兄ちゃんを求めてるつて。頭では、いつもの小町じゃないって思つてても、お兄ちゃんに触れられた感触が忘れ

られなくて、気持ち良かった時のうずきが治らなくて。小町もどうしていいかわかんないんだもん。」

「……小町。」

「お兄ちゃんのせいなんだからね……。もう一度だけ、小町を、その……気持ちよく、して?。」

「どんだけ男心をくすぐる気なの小町ちゃん? そんな恥ずかしそうにお願いされたら、俺の理性がガンガン削られちゃうからね? くそ、本当にもつてくれよ俺の自制心!」

「ん、ふあ、……。ああ。」

「パジャマの上から小町の胸を両手で揉みしだき、たまに乳首を指ではじく。今は俺のベットで小町を仰向けにして、俺は横に座っている。」

「とりあえず、キスはしないこと。そして、最後まではしないこととした。今はまだ、小町のうずきを解消させるのが優先だ。こんな状態でも、俺達は兄妹なんだってことが、互いに自制をかけている。ただ、このままズルズルとこんな関係が続けばどうなるかわからない。」

「何より、淫気を得ようとする気持ちが少しずつ増えているように思う。いずれ、俺の心が別物に変わってしまうんじゃないかと思うと、少し怖い。」

「小町、直接触るからな。」

「……あ。」

「パジャマのボタンを外し、小町の胸があらわになる。ブラはしておらず、程よい大きさの胸の真ん中で硬くなった乳首が自己主張しているのがよくわかった。」

「小町、とりあえず今日は胸でイかせてやる。」

「え?……んああ!」

「今度は直に小町の胸を揉みしだく。柔らかく、それでいて張りもある感触が、とても気持ちいい。」

「何これ、違う、んあ、今までとぜんぜ、んん！なんでこんな、ああ！感じちや、んん！」

直接触られて、より感じてみたいだな。淫気の量も多くなってきた。小町はシーツを強く握り、内股を擦り合わせて、体を悶えさせている。

俺は小町の胸を下からすくい上げるように揉みながら、親指で乳首を押し、こねくり回し、はじくのを繰り返した。

「いや、だめえ！そこ、…んあ、そんなに、あん！…いじめないでえ！」
小町は背中をそらし、胸の上に突き上げ、身悶えている。それはまるで、俺にもつと乳首をいじめてほしいと訴えているようで、更に興奮させる動きだった。

「ほら、もつと感じるんだ小町。」

俺は親指と人差し指で乳首を摘み、上下にこするようにしごき始めた。

「んにやあーそれほんと、ああーだめえ！」

俺は、更にしごきを早める。どういう触り方、攻め方が感じるのか、淫魔導でなんとなくわかるおかげか、小町の感じ方は頂点に達しようとしていた。

「ほら、小町のイクところを見せてくれよ。」

顔を近づけ、小町の耳元で囁きながら、耳を舐め、しごきを強めた。

「あ、あ、だめ、イク、イク、…イクウウー！！」

体をそらし、つま先をピンと伸ばして小町は絶頂した。小刻みに震え、パジャマの下は愛液で濡れてしまっている。

(淫気も結構吸収できたし、ここまでだな。)

これ以上小町の『女』を見続けると、更に理性が削られてしまう可能性が高い。そう思っていると、不意に鼻についた。

……………小町の下半身から漂う、『雌』の匂いが。

ドクン、と心臓が高鳴る。

ダメだ、ダメなのに…………。

「ごめんな、小町。」

俺は濡れてしまっている小町の股に右手を伸ばし、指でさすり始め

た。

「んああ！…え、まつ、ああ！なん、でえ！」

濡れてグジュグジュと音をたてながら、薄手のズボンを強く擦り、小町の股を刺激し続ける。

小町をイかせたい。淫気がもつとほしい！

「…小町、小町！」

「そこは今だめなのお！…ああ！ほんと、だめえ！すぐ、くる！きちやう！あ、また、イク、イク、んああああああ!!」

ガクガクと体を震わせ、パジャマ越しでも愛液が吹き出したのがわかるほど下がびしょびしょになった。

『雌』の匂いは更に強まり、小町の体は痙攣を続けている。

今まで以上に淫気を吸収でき、淫魔道士としての格が確かに上がったのを感じた……。

朝の風景

「……………おはよう。」

「……………おう、おはよう。」

翌日顔を合わせると、これまでになく気まずい空気が2人の間を流れていた。

結局昨日はあの後、少し体を休めた小町はそのまま部屋に戻って行った。

小町が濡れまくったパジャマのズボンと下着を脱いで、タオルで拭き、腰に巻いて下半身を隠そうとしていた時に、また臨戦態勢になってしまいそう自制していたのは言うまでもない。俺の部屋から出て行く時、一瞬こつちをチラ見して行つたが、その瞳がまだ潤んでいるように見えてなかなか寝付けなかった。

俺のステータスも若干更新されていた。ただ、

気配遮断レベル2：自身の気配を消す（効果小）。

なんで!?!なんでそのスキルだけレベルが上がつたの!?!使つた記憶ないんだけど!?!

淫気による経験値的なものは、スキルに対してランダムに付与されるのか?それとも全てのスキルに分配されるが、レベルの上がりやすさはスキルによって差があるのか?とりあえず、スキルを使うほどそのスキルに経験値がたまるってことはないようだな。

まあ、ステータス関係の考察は後回しだ。今日は月曜日で、俺と小町はこれから高校に行かなきゃならない。

今後の高校生活も不安だらけだし、波風立てすぎず、更に淫魔関係の折り合いを少しずつつけて行くしかないだろう。

食卓につきながら小町を見ると、頬がほんのり赤くなっていて、少し不機嫌そうに見えるが、多分昨日のことを思い出して照れてるっばいな。

「…お兄ちゃん。今日も自転車の後ろに乗せてって。」

「え。」

「…なに。」

「いや、俺は別にいいんだけど…。」

「じゃあ、よろしく。」

おいおい、更に気まずくなりそうだけどいいの？小町ちゃん、あなた顔が更に赤くなってるけど？

それ以降は無言の食事が続き、とうとう出発の時となったのだが。
(なんだ、この、しおらしい小町は。)

俺が自転車に乗ると、朝食の時と同じ表情のまま、小町は荷台に座り、俺にしがみついていた。

これまで自転車に乗せてた時と動きは変わっていない。なのに何故だろう。ちよつとドキドキするんですけど。

お互いの制服越しとはいえ、昨日触りまくった小町の胸の感触が背中に伝わってくるし、わずかに小町の匂いがする。もちろん良い匂いで、今までは意識してなかったのに今は少しクラつときちやう感じだ。

しばらくお互いに無言のまま自転車を漕いでいると、

「ねえ、お兄ちゃん。何か…あつた？」

あー、このタイミングで聞いてくるか。

「ん。ちよつと、な。すげえわけ分かんねえことを話すかもしれないが、聞いてくれるか？」

「いいよ、聞いてあげる。どんなになっても、小町はお兄ちゃんの妹だからね。」

やつといつもの調子が出てきたのか、少し笑いながら答えてくる。

「へいへい。それじゃあ放課後、家に帰ってからな。」

「いいけど。でも学校では本当にしつかりしてよ？昨日のことは小町が相手じゃなかったら、通報もあり得たんだからね！」

「うぐ。も、もちろん、わかってるよ。」

俺の部屋でのことは置いといて、転んだ後に胸を揉んだのは事実だからな。それに今の俺の体質は、色々面倒そうだ。

「分かればよろしい。」

そう言っつて、小町は俺に抱きつく力を強めた。

妹との関係が、少し変化したかもしれない。学校生活の方はどう

な
っ
て
行
く
の
か
、
不
安
と
期
待
が
入
り
混
じ
る
中
、
総
武
高
の
校
門
が
見
え
て
き
た
……。

次の候補

あー、また1週間が始まるのかー。

小町は、学校の玄関で会った1年のクラスメイトと教室に向かつて行った。俺は3年の教室に向かっているわけだが、内心は結構複雑だ。

今までは、早く金曜日の放課後にならないかと呪いながら登校していたといっても過言ではない月曜日の朝だったが（戸塚に会えることは除く）、現在の俺は淫魔導士。

ぶっちゃけると、スキルレベルをあげるため、学校の誰かとアレなことをほんの少ししたいなー、なんて思わないでもないのだ。

いや、マジでクズいのは分かっているんだが、淫気吸収に対する飢えみたいな感覚がまた出てきているんだよなあ。

しかし、今の俺は性的ハプニングを以前より多少起こしやすくなっているみたいだから、変に目立ってしまう可能性もあり、ぼっち的には大変複雑な週初めを迎えてしまったわけで……。

なんて思っていると、

「あーおはよう、ヒッキーー！」

「……………おう。」

出くわしちやっつたよ。いや、まあ教室同じだしね。

由比ヶ浜結衣。

奉仕部のメンバーで、性格が明るいちよつとアホな子。顔も、まあ可愛いし、何より胸に母性を感じさせる、ある意味今の俺にとって危険人物のひとりといってもいい。

「む。なんか、ふくみ？がある感じ。」

「いや、無理に知らない言葉を使おうとしなくていいから。あれだ、俺はなんでこんなところにいるんだ、学校なんて無くなっちゃえばいいのに。という世間一般の学生が普通に考えることを思っただけだ。」

「なんか凄いこと考えてた!？」

まったく、こいつは自分の危険性について全然理解してないな。

「もう。それより、一緒に教室行こうよヒツキー！」

「!?…止まれ、由比ヶ浜！」

「?…どうかした？」

くっ、今の俺達は向かい合った状態だが、何故か昨日の小町の時と同じパターンになりそうな気がする！

「いいか由比ヶ浜。そのまま、後ろ向きにゆっくりときがれ。」

「うえ!?なんで私が凶悪犯みたいな感じになってるの!？」

バカヤロー！お前はある意味凶悪な武器を目の前に備えてるだろうが！どつちかが何かにつまづいて倒れ込むパターンが想像できないのか、

「うお!？」

「へ?…きやあ！」

後ろから、ドン、という何かがぶつかった衝撃と「あ、わりい。」という声が聞こえた。そうですね、ここは廊下だから、突っ立ってたら誰かがぶつかる可能性は充分ありますよね。

そして俺は前に倒れそうになったが、なんとか踏ん張ることができたようだ。

「な、な、な、な。」

しかし、わずかに力及ばず、俺の顔はとても柔らかくて良い匂いのする大きなクツションに埋もれてしまった。

なんか上から壊れたロボットみたいになった由比ヶ浜の声が聞こえる気がするが気のせいだろう。しかし、一家に1つは欲しいな、このクツション。

「い、いつまでそうしてるの！バカヒツキー！」

「うわ!？」

俺を押し返した由比ヶ浜の顔は物凄く赤くなっていて、胸を腕でガードしながら身を引いていた。くそ、やっぱりこんな展開になっちまったじゃねえか。

「ま、待て、落ち着け由比ヶ浜。これは不幸な事故で…。」

「言い訳すんなし！もう、ヒツキーのエツチ！」

そう言っただけで由比ヶ浜は教室の方に走って行ってしまった。残った

俺の周囲には、一部始終を見ていた奴らが俺を見てヒソヒソと何か話している。ああ、早速悪目立ちしちまったなあ。

結局、あれから由比ヶ浜とは一言も話さず放課後を迎えた。まあ、話す方が少ないからいつもとあまり変わらないんだが。たまにこっちを見ては、顔を赤くしてそっぽを向いていた。

3年生になってもクラスの顔触れはほぼ変わらず、休み時間に話しかけてくれる戸塚は俺の癒しだ。

由比ヶ浜は三浦達と教室を出て行った。どうやら部活には来なさそうだな。

「さて、じゃあ行くかね。」

今の俺にとっての危険人物その2が待ってる筈だ。

「うす。」

「こんにちは、比企谷君。大丈夫？いつもより目が腐っているようだけど。今更あなたの不遇さを嘆いてもどうしようもない事なのだから、思いつめてはダメよ？」

「まったくだ。困った部長さんをどうにか出来ないかいつも嘆いてるんだが、そろそろ諦めた方がいいかもしれない。」

雪ノ下雪乃。

部室に入った俺をいきなり罵倒するのは軽いジャブで、その知識量からくり出される毒舌の数々は俺を17分割しちやうまでである。綺麗な黒髪ロングと完全美少女な姿は、まさしく氷の女王である。

「由比ヶ浜さんは用事があったて来れないそうよ。」

「みたいだな。小町も用があったて先に帰ったし（まあ、先に帰ってもらったんだが）。」

奉仕部のメンバーは俺と雪ノ下、由比ヶ浜に、今年入部した小町。

あとは準部員的な生徒会長がいなくてもない。あいつ、段々生徒会やサッカー部より奉仕部にいることの方が増えてきてる気がするんだが。

本当はさつきと帰りがかったところだが、来ないと平塚先生や雪ノ下がうるさいからな。まあ、机の端っこ同士で黙って読書をしてれば何も起こらんだろ。

と、思っていた時もありました。

もうちよいで今日の部活も終わりかと思っていたら、バキツという音と「きゃー！」という声が聞こえ、見ると雪ノ下が床に尻もちをついていた。

「おいおい、大丈夫か？」

「ええ。どうやら椅子の脚が劣化して折れてしまったようね。」

マジか。どんな偶然だよそりゃ。鉄製の脚がピンポイントに劣化するなんてあるのか？実は雪ノ下って結構おも、

「何か？」

「な、何でもありません！」

く、かんじまったじゃねえか。何？エスパーなのこいつ。

「まったく大丈夫かよ、うげ！」

「え？」

完全に気を抜いていた俺は何気なく雪ノ下に近づいてしまっていた。そして何もなかったところで足を滑らせてしまう。

倒れる瞬間、壊れた椅子が危ないと思って左手で押しつけ、右手で床についたが支えきれず、すぐさま左手を戻すも間に合わずに雪ノ下を押し倒すように倒れてしまう。

「きゃあー！」

左手は雪ノ下の右胸をがっしり掴み、顔をお腹にうずめるようにおおい被さってしまった。それにしても女の子はどうしてこんなに良い匂いがするんだ。小ぶりの胸も触り心地はなかなか……。

「やっさどどきなきー！」

「ふげー！」

顔の横を思い切り叩かれ、俺は床に転がされる。

見ると、顔を赤くし、眉をつり上げた雪ノ下がこちらを睨んでいた。「つ、通報されたいよねエロ谷君。女子のお腹に顔をうずめるばかりか、胸を揉むなんて。」

「お、落ち着け雪ノ下！わざとじゃなかったんだ！足を滑らせただけで…。」

「犯罪者はそう言うのよ。安心しなさい、面会には行ってあげる。」

「完全に捕まってるじゃねえか！いいから話を、うお!?!」

「な!?!」

テンパってた俺は、また不用意に雪ノ下に近づこうとして、体勢を崩して倒れ込んでしまった。

「ひゃんー!」

「ふざ!?!」

雪ノ下の足をどかし、スカートの中でパンツに顔を押し付けるという漫画のような倒れ方で。

「~~~~~!」

「げふう!?!」

俺から離れ、上半身を起こした俺の頬からあごにかけてを掌底で思い切り打ち抜き、雪ノ下は荷物を持って部屋から走って出て行った。

俺はそのまま崩れ落ち、しばらく床に倒れていた。明日、部活休もうかなあ。

世界で一番の妹

「たでーまー。」

テンションが微妙過ぎて家に帰るのに時間がかかってしまった。

あの後、俺が部室の鍵を返しに行つたものの、いつも以上に目が腐つて見えたのか、平塚先生にめちやくちゃ心配されてしまった。

いや、実際、体のダメージも残つてたけどね。雪ノ下の奴、咄嗟のことだったから無意識だったとは思うが、確実に俺の意識を刈り取りに来てたぞ。

それよりも俺の心を複雑にさせたのは、由比ヶ浜と雪ノ下から淫気を吸収できちやつたことなんだよな。

アクシデントみたいな状況だったから、量も多くはないが、あの2人がわずかとはいえ、俺との接触で性的な感覚をもつたということだ。

………なんかこう、ね？むずがゆいというか。マジで明日顔を合わせづらいんだけど。まあ、妹と既にあんなことしちやつてる俺が何を今更、という話でもあるんだけど。

「お帰り、お兄ちゃん。」

「おう。ちよつと待たせちやつたか？」

「まーね。けど、いいよ。聞くのはリビングでいいよね。」

「ああ。」

さて、どう話したもんかな。

そして、俺は結局全部話した。話す時に小町が俺の隣に密着して座つてきたのは気になったが、本を買つたところから、ステータスが見えたことやスキルに関して、昨日の小町とのことについても。

俺自身全てを把握できてるわけじゃないから、想像の域を出ないこともあるが、相手が小町だったからか、思ったよりもあっさり話すことができたと思う。

「ふむふむ。つまり、お兄ちゃんは女の子にとって本当のごみいちやんになった。ということでもOK?」

きやるん♪と笑顔でキツイことを言う。やだ、ちよつと可愛い。

「小町ちゃん?完全に否定できないけど言い方があるんじゃない?」

「えー、だって鬼いちやんに目をつけられた女の子は貞操の危機ってことでしょ?そうじゃなくても胸とか触ってくるし。」

ん?お兄ちゃんの部分で言い方に違和感があったような…。

「あのね、胸を触ったのはわざとじゃないから。ただ、そういう事故が増える気はするんだよなあ。」

間違いなく『淫魔』のステータスによるものだとは思うが。このままじゃまずいでしょこれ。

「それより、俺が人間離れしてきていることには何もないのか?今後どうなっていくかもわからないし、女性の立場や家族としても嫌だろ、こんな兄貴は。」

「もう、バカだなあ。」

そう言つて、こてん、と俺の肩に頭を乗せてきた。

「どんなになっても、小町はお兄ちゃんの妹だよ。例えばだけど、世界中の人がお兄ちゃんから離れて行ったとしても、小町は、小町だけは、お兄ちゃんのそばにいてあげる。小町的にポイント高いでしょ?」

「くうう、小町い。」

最後のがなければ最高だったが、嬉しいこと言ってくれるじゃないか。

「それに、ね?」

小町は俺の膝に手を乗せて、体を更に密着させてきた。

「ゲームみたいな話だけだし、レベルが上がればできることが増えるかもしれないでしょ?それで、レベルを上げる経験値は、その『淫気』つていふのが必要なんだよね?」

「ま、まあ、そうだな。」

なんか、小町の目が潤んできてるような…。

「ならば、そういうのをする相手が必要ってことでしょ?誰でもいいわけじゃないし、……………小町はさ、その……………いいよっ。」

小町の視線が熱を帯びてきている。

「おま、それ、……意味分かって言ってるのか？」

「昨日、お兄ちゃんに気持ち良くさせられてから、お兄ちゃんを好きって気持ちが強くなっちゃってるの。お兄ちゃんは兄妹としての線引きを気にしてるみたいだけど、小町的には、あんまり気にしなくてもいいよ？最後までは、ちよつと、気持ちの整理ができてないけど……。」

最後の方をぶによぶによとさせ、顔を赤くする小町。可愛すぎる、じゃなくて。

「それは俺のスキルが効いてるせいかもしれないし、淫魔か淫魔導士の体質的な何かの影響を与えてせいかもしれない。だから、」

「お兄ちゃんを好きになっってきたる気持ちは偽物かもってこと？小町としては関係ないよ。兄妹以上の思いを持ち始めてる、それが今の小町の全てだから。お兄ちゃんが気持ち的に納得できないのは仕方ないかもだけど、小町にあんなことしといて、全部否定するのはどうなの？」

「ぐ。」

確かにそれを言われると……。最近は俺の理性が働かなくなってきたからな、本体に似てきて仕事しなくなっっちゃうと完全にアウトだけど。

「ね？お兄ちゃんにとって一番身近な小町が、色々都合がいいと思うんだけど。お兄ちゃんもこのままじゃ困るだろうし、それに……いろいろ試しやすいと思うよ？」

ぶふっ!!

「小町、いつからそんな、はしたないことを言う子になったんだ。」

「だから、ごみいちちゃんのせいだよ。そして、お兄ちゃんにだけの限定小町なのです♪」

がはっ!!

「お前なあ、男にそんなこと言ってる、どうなっても知らないからな？」
「うん、だから、よろしくね。」

なら、こつちも腹をくくるしかないだろ。

「わかった。じゃあ、試させてもらう。」

俺もいくらか考えてたことがあるからな。

「ステータスを更新させたり、スキルのレベルを上げるには淫気が必要なのは多分間違いない。ただ、どの程度のこととどのくらい淫気が女性から出るのかはわからない。そして、一気に吸収すると、少しずつ継続して吸収するのでは、どっちが効率的のかもわからない。個人差があるかもしれないし、全ての女性から吸収できるわけじゃないかもしれない。」

「小町だけじゃダメかもってこと?」

「……まあな。」

由比ヶ浜と雪ノ下のことは、後で話すことにしよう。

「とりあえず、淫気の量が必要なのは間違いないからな。小町にはこれから、継続的に淫気を吸収できるような行為をしていく生活になると思う。いいな?」

「……うん。」

また、小町の中の『女』が出てきた。今まで見たことがなかった、色を帯びた表情。

「俺とは常に一緒にいてほしいところではあるけど、まずはいつもどおりの生活をして、その合間にしていこうと思う。」

今でも歯止めがきかない感じだから、一緒にいすぎると、際限なくどこまでもやっちゃうだろうからな。

「いいよ。じゃあ、今日は……どうする?」

今は晩飯前か。食事の準備もあるし、その後がいいよな。

「そうだな……。それじゃあ、晩飯食い終わったら、(ご)によ(ご)によ(ご)によ(ご)で部屋に来てくれ。(ご)によ(ご)によ(ご)によ(ご)から。」

「……………へ?」

新たな道に目覚めるかも

コンコン、と部屋のドアがノックされた。どうやら、小町の準備ができたみたいだな。

「おう、入っていいぞー。」

「……………」

ゆっくりとドアが開き、小町が中に入って来た。上は白色のTシャツに下はショートパンツか。言ったとおりにしてきたかどうかは一見して分からないが、多分大丈夫だろう。

顔を赤くさせ、羞恥に染まってるのが丸わかりだ。若干睨んでるけど、そこがまた可愛い。さすが小町だ。

「じゃあ、行くか。」

「スケベ、変態、八幡。」

「だから、最後のは悪口になってないから。そもそも、手伝ってくれるって言ったのは小町だろう？」

「そうだけどさ…。」

おうおう、恥ずかしがってるな。まあ仕方がないとは思うが。けど、継続して淫気を出させ、更に量も多く吸収していくための最初の実験としては良い案だと思うんだけどな。

俺が晩飯前に小町に伝えた内容は、

『下着は着けずに、腕や足が出来るだけ見えるような服で部屋に来てくれ。その後、外に出かけるから。』

というものだ。以前だったら、小町の羞恥にあふれる姿を誰かに見せてしまう可能性がある行為は絶対にしなかっただろうが、今は、小町の恥ずかしがる姿を見たいという気持ちが入っている。

そんな小町を見ながら、色々イタズラして淫気を吸収するのは、また格別だろう。

「…なんかさ、お兄ちゃん、こういうエッチな時だけ少しSになってない？相手が小町だからってこともあると思うけど。」

くっ、相変わらず俺の心を見透かしてくるな。流石は俺の妹を何年も続けているだけのことはある。

「そんなことはない。俺ほど紳士な奴はいないぞ？今の八幡的にポイント高い。」

「はいはい、ごみいちゃん、ごみいちゃん。」

……恥ずかしさを紛らわすためだと思うけど、妹が冷たい。

さて、玄関を出たのはいいが、どこに向かうかまでは特に決めてない。まあ、人が少なそうなところを適当に歩くとして、その前に少し淫気を吸収しやすくするか。

「…小町。」

俺は小町を後ろから抱きしめる。そして、お腹をさすり始めた。

「え、お兄ちゃん!？」

お腹をさすっていた手を、少しずつ上に上げていく。

「待ってー…ここ外、ひゃん!？」

シャツの上から小町の胸を揉み、指で乳首をいじる。

「よしよし、ちゃんとブラは着けてないな。えらいぞー。」

自己主張し始めた乳首を手のひらでシャツとこすり合わせるようにさすっていく。

「ふ、んん。…ねえ、誰か来ちゃうかも、んあ、だから…。」

そう、夜中とはいっても、玄関を出た目の前なのだ。家の前を誰かが通ったら、何をしてるかすぐにバレるだろう。

「大丈夫だって、少しだけだから。それに、下をまだ確認してないだろう?」

俺は小町の胸をいじりながら、片方の手を、小町のお腹をなぞりながらゆっくりと下におろしていく。

「ま、待って、そっちは、はうん!？」

ショートパンツの中に手を入れ、昨日は下着ごしだった小町の大事な場所に、今度は直に触れる。ふむ、こっちも履いてないな。まだそんなに濡れてはいないな……ん?この感触は…。

俺は手をショートパンツから出し、

「小町、お前まだ生えて……。」

「う、うるさい！人が気にしてること言わない、で！あといいい加減、んん！」

おっと、胸はいじり続けたままだった。仕方ない、まずはこの辺にしておくとするか。

「すまん、すまん。じゃあ、今度こそ行くとするか。」

「うー、この先が不安で仕方ないよ……。」

「いやー、兄妹で静かに散歩するのもいいもんだな。」

「ん、そうだ、ね。」

家を出てから、適当にぶらぶらと歩いている。ただし、時折小町の体を撫でながらではあるが。

今は、少し体を傾けて小町の尻を撫で回しながら歩いている。

通行人に見つかったら、完全に事案ものの状態だ。

だんだん、小町の体が出来上がってきてるな。今も、体をぶるぶると震わせ、目が潤んできてるのがわかる。淫気の量も少しずつ増える気がするしな。

歩きながら一応目的地を決めたので、このまま行こうか考えていると、向こうから人影が見えて来たので、小町の尻から手を離す。小町は小さく「うー。」と言いながら、こつちを見上げてくる。イかせない程度の軽い触り方とはいえ、ずっと続けてるからな、しかも外だし。小町もだいぶ感じてきてるようだ。

そこで、近付いて来ている人影が少しフラついていることに気がついた。互いの距離が近付くにつれて、酔っ払って足元が若干おぼつかなくなっている、サラリーマンらしきおっさんだとわかる。道路の脇に寄ると、酔っ払っているおっさんは、俺達を見向きもせず横を通り過ぎて行った。歩く速度はとても遅い。そして、ちよつと閃いた。

夜に人が通らなそうなところを歩いて来ただけあり、さつきから人とすれ違わなかった。今もあのおっさん以外に人はいない。

俺は小町をおっさんの方に振り向かせた。

「小町、Tシャツを胸の上までまくり上げるんだ。」

「え!?何言ってるの!？」

「いいから、早く。」

効力は小さいが、魔眼で小町の抵抗心も下げしておく。

「うー。わかったよ…。」

渋々と、そして羞恥に顔を染め上げて、ゆっくりとシャツをまくり上げていく。

あらわになった小町の胸は、頂点がピンと固くなっていた。小町は息が少し荒くなっていて、全身が震えている。

「小町、このまま、おっさんの後をついていくぞ。」

「ええ!?で、でも……。」

「大丈夫、バレはしないって。さ、行くぞ。」

俺は小町を押しながら、小町の尻を撫で始める。

「はうーわ、わかった、わかったから…。」

そして、小町はおっさんを追ってゆっくりと歩き始める。おっさんは本当にゆっくりで、やっぱりそれなりに酔っ払っているのがわかる。そう簡単に俺達に気付くことはないだろう。

「小町、シャツから手を離すなよ。あと、大きな声を上げないように頑張るんだ。」

俺は玄関でしたように、小町の後ろから、小町の胸をいじり始めた。

「んん!!だめ、これ、んん!ほんと、むり…んん!」

外にさらされた小町の胸を揉みしだき、乳首を何度も指先ではじく。コリコリと固くなっていて、直に触る小町の胸の感触は、たまたまなく気持ちいい。淫気もどんどん吸収されていく。

「あ、あ、だめ、声、んん!気付かれちゃう、よ。」

「ほら、頑張れ。本当に気付かれるぞ?」

まあ大丈夫だろう。後ろ歩いてても気付かないし、今の抑えた音量なら問題ない。でも、もう少し小町の可愛い姿が見たいなあ。

そして、小町の胸から両手を離し、ショートパンツに手をかけた。

「え?ま、待って、お兄ちゃん。これ以上は、小町、もう……。」

「耐えられないか？いいよ。お前は何も気にせず、体の感覚に任せればいいから。」

そう言っつて、俺は小町のショートパンツを足首まで一気にずり下ろした。

「あ、あ、ああ、ああ。」

全裸とほとんど変わらない状態で、外で、知らない男の後ろを歩いている。そのありえない現状が、今まで与えてきた小町の体にトドメをさそうとしていた。

歩きながらも、小町の体は震え、愛液が垂れてきている。

「あ、気付かれた。」

小町の耳元で、ぼそつと呟く。もちろん嘘だ。おっさんは歩き続けているし、小町もそれが見えている。しかし、小町はそれが限界となったようだ。

「あ、あ、だめ、だめ。」

小町の体が腰を中心に小刻みに震え始め、俺はとっさに小町の口を塞いだ。

「ん、ん、ん、ん~~~~~~~~!!!」

ガクガクガク、と腰を突き出すように痙攣し、びゅっ、びゅっ、と小町は潮を吹き出した。

潮はおっさんの脇にそれ、小町は俺にもたれかかってきた。たまにビクッと体を震わせており、余韻が抜けていないようだ。

持っていたハンカチで小町のアそこを拭く。その際も体を震わせ、軽くイッているようだった。

俺は小町の服を元に戻し、小町をおんぶして目的地に歩き始める。ちよつとやり過ぎちやったかなあ……。

羞恥に染まる

「う〜。」

俺の背中中で、さつきから可愛く唸っちゃってまあ。確かに盛大にイツちやつてたからな〜。

「気にするな小町。人間誰しも黒歴史の1つや2つ、あるもんだからな。お兄ちゃんなんてあれだぞ？黒歴史が多すぎて、それ以外を探すのが大変なんじゃないかというレベルなんだぞ？」

「ごみいちゃんの黒歴史なんかどうでもいいよ。」

「どうでもいい…。」

酷くないですかね、小町さんや。

「小町が気にしてるのはさ、その…。」

うん。おんぶしてる時に首元でボソボソ話されると、息がすげえくすぐったいわ。というか、まだ現実を受け入れきれないみたいだな。

「自分が思ってたより変態だったことが恥ずかしいか？」

「んな!?!こ、小町は変態じゃないよ!」

見えなくても顔が真っ赤になってるのが簡単に想像できるな。

「違わないだろ？外で、知らない男の後ろでほとんど裸の状態で、思いつきりイッてたじゃねーか。しかも、その時どこも触ってなかったんだぜ？なのに潮まで吹いてさ。完全に露出の素質があるだろ。」

「う〜〜。あむっ!」

「あ、こら、首元に甘噛みするんじゃない!」

恥ずかしいからって甘噛みしてくるとか、猫かよ。可愛いな、チクシヨ〜!

「それより、まだ腰抜けて歩けないままか？」

「まーだだよ。こうなっちゃったのはお兄ちゃんにも責任があるんだから、しっかりと歩いてよね。」

ほんとかよ。まあ、あとそんなに歩かないけどさ。…そうだ。

「仕方ねーな。じゃあ、お駄賃を払ってもらうことで、手を打ってやるよ。」

「お駄賃？」

「目的地までもうすぐだ。それまで、胸を俺の背中に擦り付けるように上半身を動かしてくれ。」

つまり、俺の背中を使ってセルフオナニーをしてもらうってことだ。そこまで大きな快感にはならないだろうし、着くまでのいい暇潰しになるだろ。俺も感触を楽しめるしな。

「へ、へん、変態だー！」

「いや、さっきの流れからすれば完全にブーメランだからね？ いいから、ほら、早く。」

「うー、どんどん流されちゃってる気がするよ。」

そう言いながら、小町はゆっくりと上半身を上下に動かし始めた。俺も小町も上に着てるのはTシャツだけだから、小町のふにっとした胸の感触と、ピンと立っている乳首の感触がよくわかる。

「ふ、ん、ん、ん。」

あー、小町の熱くなっている吐息がエロいなー。

「さあ、着いたぞー。」

そう言つて、小町をベンチにゆっくりと降ろした。

「ん。ここ、公園？」

「そう、公園だ。」

俺達の家からそれなりに離れていて、今の時間は人通りがほとんどない。街灯もところどころにあるだけで、全体的に薄暗い印象だ。

「ここなら、誰かが来たとしても、俺達の知り合いや近所の人ってことはないだろ。夜だしな。」

「……………」

いいぞ、また『女』の顔になってきたな。さっきまでのじや俺のステータスに変化はなさそうだし。もっとお前の可愛い姿を見せてくれよ。

「さて、さっきの続きといくか。まずはベンチに座ったまま、Tシャツ

を胸の上まで上げてくれ。」

「……………」

小町はゆつくりとTシャツを上げ、胸をさらけ出した。体がふるふると震えていて、目も潤んできている。

俺はベンチの後ろに回り、小町の乳首を両方とも人差し指でカリカリしながら、耳に息を吹きかけるようにカウントダウンをする。

「いち、にー、さーん、しー……………」

「ふん、うう。…あ、くう。」

小町はピクピクと体を反応させ、内股をさすつている。ここに来るまでもいじってきたから、感じやすくなってるな。

「にじゅうはちー、にじゅうきゅー、さんじゅー。」

「…………… つはあ、はあ、はあ。」

指を離すと、小町はすぐさまTシャツを下ろし、大きく息を吐き出した。さつきからずっと同じところを刺激し続けているからな。イかないまでも、体が火照ってしかたないだろう。

「よし、じゃあ、こっちに来てくれ。」

「ん。」

小町をベンチの後ろに誘導する。

「次は、下を脱いでくれ。」

「……………わかった。」

ふむ。だんだん素直になってきてるな。疲れてきたのか、次への期待か。嫌がつてる顔ではないな、だってエロい顔してるし。

小町はショートパンツに両手をかけ、少しずつ、下に下ろしていく。

「……………あ……………」

「ん？……………うわ。」

小町は膝くらいまでショートパンツを下ろしていたが、あそこから糸がツウーと引かれていた。よく見るとショートパンツも結構濡れちゃってるし。

「……………エロ。」

「！」

俺がつい、思ったことを口走ると、小町は体をビクツとさせ、明ら

かにあそこから汗が垂れてきて太ももを伝ってきていた。え、言葉だけで少し感じちやつたかんじ？

「えーと、脱いだらベンチの下に置いてくれ。立って、腕は後ろで組んで、下を隠さないように。」

小町は言われた通り腕を後ろに組み、立ち上がった。少し俯いて、恥ずかしさで体を震わせている。あそこから、汗が垂れたままで、薄暗い中で僅かな月明かりが反射して、テラテラと光っている。本当にエロいです、ありがとうございます。

「じゃあ、このまま公園の中を少し歩こうか。着いてきてくれ。」

「え？そんな……。」

「いいから、ほら。」

「……うん。」

ベンチの裏から、ゆっくりと歩き出す。小町は周囲が気になるのか、辺りをキョロキョロと伺っている。

ベンチの前を過ぎ、少し進む頃には、小町のつゆが足首まで垂れてきていた。歩いて来たところに雫の後が若干残っている程だ。

相変わらず人っ子1人いない公園には、草木や風の音以外に、俺達の足音と小町の荒くなってきた息づかいだけが聞こえてくる。

そして、街灯のある箇所で俺達は止まった。

街灯に照らされた小町の下半身は、足の内側をつゆが伝っていて、エロさだけでなく、綺麗だと思わせるような状態となっていた。

「……お兄ちゃん、ここはすぐバレちゃうよ……。遠くからでも見えちゃうから……。」

周りに視線を巡らせ、内股をもじもじさせながらも、言いつけ通り、腕は後ろに組んだままだ。

「大丈夫だ、誰もいない。さあ、足を肩幅に広げて。」

小町は体を震わせながらも、ゆっくりと足を広げていく。愛液はまっすぐ糸を引いて地面に垂れている。

俺は小町の横にしゃがんで、あらわになっているお尻に手を添えた。

「んん!!」

その瞬間、小町はガクガクと体を震わせた。愛液は更に垂れて、息もさつきより荒くなっている。

「……小町。お前、今でイツたのか？」

「だって、だって……。」

うわー、完全に発情しちやつてる顔だよ。というか、感じやすくなり過ぎでしょ。

「ほら、数えるぞ。いーち、にーい、さーん……。」

俺はまたカウントダウンをしながら、小町のお尻をさすり、揉んで刺激を与えていく。

「ああ、んああ、だめえ。」

小町は足腰を震わせ続け、あそこからの汁も出し続けている。こりや軽くイってるのが何度か続いてるな。仕方ない、ここで1回きちんとイかせとくか。

「……………にじゅうきゅー、さんじゅー。」

最後の瞬間、片手で尻を強く鷲掴み、もう片方の手で小町のあらわになっているヌレヌレになったワレメをなぞりあげた。

「!!!」

ピクン、と体を震わせ潮をピュツと吹き出した小町。俺は素早く立ち上がり、片手で小町の口をおおい、そのままワレメを上下になぞり続けた。何度も、何度も、何度も。

「んん!!んんー!!んんんー!!!」

小町は頭を後ろにのけぞらせ、首を上に向けながら、ビュー、ビュー、と潮を吹き続けた。腰がカクカク動き、あそこに何かを迎え入れようと必死になっているような動きは、とても扇情的で、抑えた手の中から聞こえる、くぐもった小町のいき声と合わさり、高校生になったばかりとは思えない『雌』の色気が溢れた姿となっていた。

順調な開発

「お兄ちゃん、これ以上は、ちょっと厳しいかも。」

息を整えながら、まだ少し火照った感じで小町が話しかけてくる。今は上下をきちんと着させてベンチで休ませている状態だ。さっきは汁でびっしりだったし、足腰をガクガクさせてたしな。だが、確かに初っ端からやり過ぎた感はある。

「ふむ。仕方ない、今日は帰るか。」

「……………これ以上は小町がお兄ちゃんを襲っちゃいそうだし。」

「ん？なんか言ったか？」

何か呟いてたような…………。

「何でもないよ。それより、家に帰るならもう少し休ませてもらっていい？足にあまり力が入らないんだよね。」

「安心しろ、小町。お兄ちゃんがしつかり、おぶって行ってやるからな。」

「うえ、嫌な予感しかしないんだけど。念のため聞くけどさ、ただおんぶしてくれるだけだよな？」

「え？ただ帰るだけだとつままないだろう？」

むしろ、勿体ないと思うまである。

「あー、ほんと、こういう時だけ性格というか考え方が変わってきてる気がするなー。」

あれ、なんか呆れられてる？あ、ため息までついた。

「あのね、お兄ちゃん。小町はもう結構、その、イツちゃったから、きついわけですよ。足もヤバイし。それに、これ以上感じちやうと…………。」

「いいんだよ。どんどん堕ちて、はまって、そんな小町を、俺は見たいんだから。」

「…ぐ。小町にあれだけしておいて、そんなセリフを言うなんて。魔性の男って感じでちよつといいかもだけど、妹へのセリフとしてはアウトだなー。」

おかしい、思ったより引かれている。何故だ。

「まあ、それはおいといて。はい、立ってー。それからー。」

「え、ちよ、また!?!」

「そんで、よいしょっ、と。」

「うー、こんなのぼっかり……。」

よし、これで準備OKつと。今、小町は俺におぶさった状態だ。ただし、またも服を胸の上までまくり上げ、ショートパンツは股下から少し下ろした格好ではあるのだが。

正面から俺達を見ただけなら、特に違和感はない。しかし、横や後ろから見るとまずいことこの上ない格好となっている。小町の胸は俺の背中に押し付けてる状態だから先の方までは見えていないが（その分、俺が背中越しに感触を楽しめている）、お尻の方はどう見ても丸見えだ。仮に下から見ることもできたら、小町の可愛らしいあそこが、足を広げているためにはつくりとした絶景となっているに違いない。

「さーて、帰るか。」

「ね、ねえ、お兄ちゃん。流石にこれはまずいんじゃないかなーって、小町は思うのですよ。」

「安心しろ、小町。あとはまっすぐ帰るだけだからな。まあ人目は気にして行くつもりだが。」

「いや、寄り道するかどうかじゃなくて。本当にこの格好のまま、家まで帰るの?」

「ん? そうだけど?」

「うわー、迷いが無いなー。どうしよう、近所の人に会って、その人の前でイッチャったりしたら、完全に戻れないところまでいっちゃいそうだよ……。」

「小町ー、大丈夫かー?」

「……ふう、ん、大丈夫じゃ、ない、よ。」

「そっかー、大丈夫じゃないかー。」

まあ小町の息が悩ましい感じになってるし、胸や腰をもぞもぞ動かしてるから、いい感じになってきてるのはわかってたけど。

「お、誰か歩いてきたぞ？小町。」

「……」

あ、ビクつてなった。可愛いなー小町は。さて、歩いてきてるのは若い男か？スマホを見ながら歩いてきてるな。いちいちこつちを注目しなさそうだし、ちようどいいな。

「若い男か、小町の格好がバレたら、小町のいろんなところをじっくりと見られちゃうんだろーな。」

「……ふう、……ん。」

「そのままついてきて、触られたりするかもなー。」

「……はあ、はあ。」

段々と男との距離は近まり、俺は道の端に寄って歩く。男はこちらをわずかに確認したあと、何事もなく通り過ぎていった。振り返って見ても、男が小町の格好に気付いた様子はなく、そのまま去って行く。

「……あ、……ダメ……」

震える小町の声が聞こえたかと思うと、ぷしゅっという音と共に背中に生温かい液体がかかった。小町の体も軽く震えている。

「どうした？小町。触ってもいないのに、またイツちやったのか？知らない男の近くであそこをさらけ出して、見られるかもしれないと思っただけじゃなかったのか？」

「……う、……ごめん、なさい。」

「いや、変態で露出狂な小町でも、お兄ちゃんは愛してるぞ。ただ、帰ったら少しお仕置きだな。」

そう言うと、また小町の体が震えた気がした。うーむ、どんどん小町が開発されて来ているような気がする。

「ふう、なんとか帰って来れたな。」

「……はあ、はあ。」

家の前で小町を下ろし、服を整える。下はビチヨビチヨだげど。

「……ねえ、お兄ちゃん。」

「ん?」

「小町、お兄ちゃんとすっごくキスしたい。っっていうか最後までしたい。」

「んん?」

あれ、やっぱり初っ端からやり過ぎてた?

「どれだけ焦らされたと思ってるの?もう、小町のあそこが疼いてしょうがないんだげど?」

あちゃー、完全に出来上がった顔になっちゃってるわ。

「まだ小町とそこまではしない。それより、お仕置きするって言ったのは覚えてるか?」

「え?うん、まあ。」

「ちよつとしたお仕置きのもりだったけど、俺の言うことをきちんとな聞かない子には、しっかり教えこまないとな。それじゃ、服を全部脱ぐんだ。」

「……はい。」

ゆっくりと服を脱いでいく小町。下は洪水状態だし、胸の先もピンと立っていて、男をこれでもかと誘った姿だ。

「よし。ちよつと家から物を取ってくるから、ここで待つてくれ。」

「え!?…そんな。」

「大丈夫、すぐに戻る。」

そして、小町の服を持って家の中に入った。全裸の小町を外に残したまま。

音を立てず、出来るだけ早足に必要な物を取り、小町の服は洗濯かごに入れて、外に戻る。

「小町、大丈夫か、うお!?!」

外に出た瞬間、全裸の小町が抱きついて来た。数分とはいえ、1人で外で全裸のままにいるのは不安だったし、怖かったのだろう。しかし、それだけじゃない。俺は小町のあそこをまさぐり、どれだけ汁があふれているか確かめた。

「おいおい、小町。外で全裸になるのがそんなに気持ち良かったか？
ぐしょぐしょになって、音が響いてるぞ？」

「ああ……ダメ、今は、すぐイっちゃうからあ、……んああ！」
ぷしゅつと液体を飛ばし、体を震わせる小町。

「まだお仕置きしてないのに、もうイったのか？まあいいや。まずは
これをつけて、と。」

「これって、お兄ちゃんのアイマスク？」

そう、小町につけたのは俺がたまに使ってるアイマスクだ。遮光性
もバツチリで、小町は今、何も見えていないだろう。

「ほら、手を引いてやるから。こっちだ。」

「え、でも、そっちは道路……。」

「ああ、小町は道路でオナニーしてもらおう。3回いくまで家に入らな
いからな？」

「え!?そんな、無理だよ、近所の人に気付かれるかもだし、誰か通っ
たら……。」

「口は俺が抑えてやるから、今の小町ならすぐイっちゃうだろ？ほ
ら、早くしないと本当に誰か来ちゃうぞ？」

「わ、わかったよ……。ん、ふ、んん。」

俺が小町の口を抑えると小町はあそこをいじりだした。息も荒く
なって来て、クチュクチュと液体の音が大きくなって来た。そして。

「ふう、ん、んんー!!」

腰を少し前に突き出すようにして、あつという間にイってしまった。
た。

「もうイったのか？でも、あと2回だぞ。」

「ふー、ふー、ん、んん。」

息を整え、今度は片手で胸も触りだした。

「いやー、それにしても、小町はいつもそんな風にいじってオナニーす
るのか。」

「んんー……ふう、ふう、んんー！」

お、俺の言葉にも反応しちゃってるな。

「あつ、手が滑った。」

後ろから口を塞いだ状態で、片方の手を使い、小町の乳首をクリツとひねった。

「ん?! っんんー!!」

瞬間、小町はガクガクと体を震わせ、ピュツと潮を吹き出した。やっぱり、他人が触ると感度が違うなあ。目隠しのせいで、感覚が鋭になってるのもあるだろうしな。

「さあ、ラスト1回だぞ。」

「ふー、ふー。」

体の力も抜けて来て、ヨダレも垂らして来ちゃってるな。今はお互いに地面に座って、小町は体育座りより少し足を開いた状態でオナニーしている。どれ、最後に…。

「待て、小町。斜め向かいの家の2階の窓が開いた。あれはあの家のおじさんか?」

「ふうう!?!」

おー、驚いてるなあ。まあ、嘘なんだが。咄嗟に胸と股を腕で隠しちゃってまあ。

「小町、自分で口を塞ぐんだ。気付かれるぞ。」

俺は小町の口から手を離し、小町の腕をどけて胸を触り始める。

「ちよつと、何して、んん! ダメ気付かれちゃうから、んあ!」

「しー、聞こえちゃうだろ?」

そう言いながらも、今度は乳首をコリコリといじり出す。

「ふうーんん、んん!!」

小町は咄嗟に手で口を抑え、体を震わせていったみたいだな。うーん、ちよつと、呆気ない感があるな。

「小町、もう1回サービスだ。」

そして、小町の制止をどけて、小町のおそこの中に中指を侵入させる。溢れ出る潤滑油のせいでちゆるんと中に入ったかと思うと今度は離さまいときつく締め付けてくる。

「んんー!!」

うお、これだけでまたイツちやったか。胸をそらしてガクガク震えてるよ。

「じゃ、抜くぞー。」

小町は首を横に振っていやいやしているが構わず、少し指を曲げ、中からかき出すように引っこ抜いた。

「ふぐう、んんんー!!!」

ビューつと盛大に潮を吹き出し、力が抜けたのか、腕を下ろした。うわー、腰がカクカク動いてて、めちやくちやエロい。

本当に、これからの日々が楽しみだな、小町。

寝ててもアウト

「ダメだ。俺はもう寝るから、お前は一人でシャワー浴びてさっさと寝ろ。」

「えー、いいじゃん。たまには兄妹水入らずでさー。」

「いや、一緒に風呂とかに入ってたのなんて、いったいいつの話だよ。」
あの後、誰にも見られていないことを確認した俺たちは家に入り、身支度を済ませてさっさと寝ようとしたのだが、小町がいきなり、一緒にシャワーを浴びようと言い出した。俺は明日の朝に軽く浴びようと思っていたのだが…。

「気にしない、気にしない。久しぶりに背中を流してあげちゃうよ。あ、今の小町的にポイント高い！」

あんだけイツてたのに元気だなー。というか、どんだけ俺と一緒にシャワー浴びたいんだ。

「あのなあ、実際のところこのまま一緒に浴びちまったら、絶対続きやっちゃうから。今日はやり過ぎちゃった感があるから、小町も疲れてキツイだろ？しっかり休もうぜ？」

「うーん、本当に、やってる時とのオンオフがきっちりしてるなあ。小町的には、お兄ちゃんとの関係がドロドロしていくのは全然問題ないんだけど。」

「あのね？俺としても、このままとは思ってないけどさ。時間はあることだし、ゆっくりと考えてだね。」

「鬼畜なのかヘタレなのか、はつきりしようよ、ごみいちゃん。」
「うるさい。」

俺自身、スイッチ入っちゃうとセーブできない自分に戸惑ってるんだからね？

「ほれ、いいから早くシャワー浴びてこい。」

「ちえ、わかりましたよー、だ。また今度ね。」

「まだ諦めてないのかよ……。」

とりあえず、俺は寝るとしよう…。

「お邪魔しまーす!」

「おい、なんで俺の布団に入って来てるんだよ。」

もう少しで意識が落ちるって時に、シャワーを浴び終えた小町がズカズカと俺の部屋に入って来て、もぞもぞと布団に潜り込んで来た。パジャマ姿の小町も可愛い。

「今日は、小町的に一緒に寝たい気分なのです。お兄ちゃんも、可愛い妹と一緒に眠れて嬉しいでしょ?」

「わーい、嬉しいなあ。」

「うわー、物凄く棒読みだなー。」

だってなあ。せつかくシャワーを断ったつてのに、この妹様は。

「はあ。わかった、わかった。ただし、何もしないから、さつさと寝ろよ?」

「えー。じゃあ、ハグをオプシヨンとして申請します!」

「どつかの店かよ。つたく、仕方ねえなあ。ほれ。」

「あ、えへへ。」

抱きしめた小町の体は、すっぽりと腕の中に収まり、柔らかくて、なんかいい匂いもした。いかん、今日のことを思い返さないように、早く寝なくては。

「いやー、お兄ちゃんに抱きつくくと安心するねー。」

こしこしと俺の胸に額を擦り付けてくる小町は、小動物っぽくて可愛い。あー、癒されるなあ。なんか、このままゆっくりと寝れそうだ。

今日はもう、何もせずにこのままぐっすり……………。

「……………ん、ふあー……。……………朝か。」

思ったよりぐっすりと眠れたな。目覚ましが鳴る前に起きたにしたら、……………んん?え!?なんか布団の腰周りが濡れてる!?まさか高校生にもなってお漏らししちゃった!?

「…はあ、はあ、はあ。」

「あれ、なんか悩ましげな吐息が……え、小町!？」

隣を見ると、パジャマを思いつきりはだけさせた小町が横になっていた。パジャマのボタンが外されてブラをたくし上げ、胸が丸見えになっている。下は膝まで下げられていて、パンツは完全に濡れているのがわかる状態だ。おいおい、布団が濡れてるのって、もしかして小町の……?？」

「どういう状況なんだ?おい、大丈夫か、小町。」

「……ん、お兄、ちゃん。やつぱり、覚えてないんだ。」

「いや、覚えてないというか、寝てたから全然状況が理解できてないんだが。」

マジで、何がどうなってんだ?

「ふふ、やつぱり、眠ったままだったんだ。無意識であんなに凄いなんて、もう小町はお兄ちゃんなしじゃ生きられない体にされちゃってるかも。」

「え、もしかして眠ったまま何かやらかしちゃった?」

おいおい、小町の様子を見るに、最後まではしてなくても、結構やつちまった感がハンパないんですけど。

「お兄ちゃんは気にしないでいいよ。小町がますます、お兄ちゃんから離れられなくなっただけだから。」

うん。やらかしちゃってるね、これ。

変化後の登校

「ん？どうしたの、お兄ちゃん。ご飯食べないの？」

「……………いや、食べるけど。」

「ふふ。もう、まだ時間に余裕があるからって、ゆっくりしていると遅刻しちゃうよっ。」

「うん。そうじゃなくてね。どうして向かい側じゃなくて、隣に座ってるのかなあ、と。」

「あ、少し狭いよね。でも大丈夫！小町は全然気にしてないよ♪」

「狭いというか、思いつきり肩とか腕がくっついてるんですけど。」

普通に食べづらいんじゃないか？

「いいじゃん、いいじゃん。今は小町達だけなんだし。さ、食べよー！」

「お、おう。」

ううむ。なんだか小町の距離感が物凄く近くなっているような気がするんだが。

「さあ、しゅっぱーっ！」

「はあ。やっぱり後ろに乗っていくのね。」

「あたり前じゃん！お兄ちゃんと一緒にいられる貴重な時間なんだよ？」

「え、あ、そう。」

「もう、照れてるの？？というか、女子高生と密着できるんだから役得でしょ？」

「なんだ、その親父くさい発想は。第一、兄妹で乗るんだから意味合いが違うだろ。」

「ええー、なんでこう、ああいう時とテンションに差が出るのかなあ。」

「なんだよ。構ってほしいのか？疲れが取れてないだろうと思って気にかけてたんだが。」

「なんかその言い方だと小さい子供に言い聞かせてるように聞こえ

て、少しイラつとするね。」

「理不尽だ。」

甘えてきたと思ったら、これだもんな。まるであれだな。気分屋な猫だな。猫で小町、猫町だな。

何それ可愛いんですけど。一家に一匹欲しい、って既に俺の妹として居たんだった。

「お兄ちゃん？何か馬鹿なこと考えてない？」

「にや、にやんでもにやいぞ？」

く、焦って俺が猫みたいになっちまったじゃねえか。誰得だよ。

「もう、変なこと考えて事故らないですよ？」

「へいへい。小町も乗ってるもんな。」

「そうじゃなくて。もし、またあんな事故を起こしてお兄ちゃんがまた入院しちやったら、小町は嫌だよ？多分悲しくて泣いちゃうよ？」

「小町……。」

おいおい、俺への好感度が上がり過ぎじゃないか？

「というか、もしまたあんなに心配させるようなことしたら……絶対に許さないから。」

……あれ、やっぱり下がってる？何か怖いんですけど？

いかん。ここは流れを変えなくては。

「……ねえ、お兄ちゃん。これから学校なんだけど。」

「分かってる。少し休憩だ。」

「……公園のトイレの裏で？」

「大丈夫、木とか生えてる草で周りから見えづらくなってるから。ほら、壁に手をつけて。」

「うう、こういう時は、本当に唐突なんだから。もっと心の準備をさせてほしいんだけどなあ。」

とか言いながら、素直に従ってくれるんだよなあ、小町は。どれ、ま

ずはスカートをめくってパンツの上から可愛らしいお尻を撫でて…。

「ん…：触り方が、どんどん、いやらしくなってる、気がする。」

「そうか？あんまり自覚はないんだが。さて、次は前の方を…。」

「ふあ、んん！」

「おいおい、既に若干湿り気があるんだけど。もしかして、ここに来た時に少し期待してたとか？」

「あ！んん、だって、…あう、仕方、…あん！ない、じゃん。」

「どれどれ、うわ。」

パンツを下ろすと、小町のおそこら雌の匂いがムワツと広がった。汗ばんでるだけじゃなく、感度も上がってるなあ。

「さて、味はどうか…：…ペロ。」

「んああ!!！」

「うお?!」

おい！小町の奴、ちよつと吹いちやっただけですけど。足もガクガクいってるし。顔にかかっちゃまったよ。

「大きな声出すなよ。この時間だと、流石に誰かくるかもしれないだろ。」

「ん、はあ、言うことが、…：…それなんだ。お兄ちゃんからの刺激が、いつも凄すぎるからなんだけど。」

「しかし、少ししよっぱい感じか？もう一回だな。小町、口塞いどけよ。」

ちよつと、全体的に押し付けて舐めてみるか…：…ペロっ。

「んむくく?!?!」

「うおお!」

更に吹いちやっただよ。つうか足に力入ってないから俺が手で支える感じになってるし。

…：…こんなんじや、パンツを履いてもすぐに濡らしちゃうよな？